
● 第7回静岡国際 オペラコンクール

渡 辺 悠 平

「静岡国際オペラコンクール」は、静岡県ゆかりのプリマドンナ三浦環の活躍をたえ、没後50年の1996年から3年に1度、同浜松市で開催されている。2003年には「国際音楽コンクール世界連盟」の声乐部門にアジア圏のコンクールとして初めて加盟し、世界の若きアーティストの登竜門として認知が進んでいる。

2014年11月に開かれた第7回大会には、27の国と地域から242人の出場応募があった。東日本大震災のあった2011年の前大会では、応募者数を200人以下に減らしていたので、関係者一同はこの数字を見てほっと胸をなで下ろしたことだろう。事前の予備審査で、木村俊光審査委員長ら4人の審査委員が音源と書類をもとに予選出場者を選出し、最終的に66人がエントリーした。

予選・本選の審査方法は以下の通り。

【第1次予選】

アリア2曲を持ち時間10分で演奏。自選曲と選定曲（4曲を事前申告し、そのうちの1曲を審査委員会が指定）をピアノ伴奏付きで歌う。

【第2次予選】

事前申告したオペラ作品の役から、1次予選通過後に審査委員会から指定を受けた部分を歌う。持ち時間は20分でピアノ伴奏付き。

【本選】

予選とは異なるアリア2曲（自選曲と選定曲1曲ずつ）を歌う。伴奏は東京交響楽団によるオーケストラ演奏。

第2次予選は世界でも珍しい審査方法で、大会の特徴になっている。歌唱力だけでなく、作品の知識や理解度、そしてそれらを観客に伝える表現力が併せて求められるため、今大会でも多くの出場者を悩ませた。出場者の中には花や手紙などの小道具を手にして舞台上がる者もいたが、もしかすると薬にすぐる思いだったかもしれない。また指定された部分に他の歌手との掛け合いがあるような場合、ピアノ伴奏者がその部分を歌でフォローしたため、2人の信頼関係も審査に響いたように思う。

第1次予選は韓国勢が豊かな声量で他を圧倒したが、第2次予選で状況が一変。難関を突破したのは日本勢4人と、韓国1人、カザフスタン1人だった。審査の方法上、舞台経験が大きくものをいうようで、ファイナリスト6人のうち、5人が出場ラストチャンスとなる30代歌手だった。優勝の栄冠をつかんだのは、本大会初出場の日本人ソプラノ歌手鳴原奈美。確かな技術と堂々たるたたずまいで観客を魅了し、来場者の投票で決まるオーディエンス賞も受賞した。2位に韓国のユン・キフン（バリトン）、3位にカザフスタンのアナスタシア・コージュハロバ（ソプラノ）が続いた。将来性を考慮して贈られる三浦環特別賞には、唯一の20代ファイナリスト小堀勇介が選ばれた。

華々しい舞台の陰で、多くの市民が裏方として尽力していたことにも触れたい。海外から訪れた出場者が異国の地で実力を発揮できるように、市民ボランティアが通訳や誘導を担当した。

過去何大会にもわたり参加している常連ボランティアもいるそうで、彼らの存在は大会にとって何物にも代え難い財産となっている。また新しい試みとして、アートマネジメントを学ぶ静岡文化芸術大学の学生達にポスターのデザインや記録映像の撮影が任された。こうした若者の活躍が、大会の新しいファン獲得に繋がることに期待したい。

一方で残念ながら、体調不良などを理由に出場辞退者が続出。木村審査委員長は表彰式の総評で「体調管理もオペラ歌手の務めの一つである」と苦言を呈した。出場者の出身国の多様性は、大会で耳にできる音楽の幅を広げるものであるだろうから、一鑑賞者としても非常に残念だった。また、例年のことだが大会期間中、ホールには空席が目立った。予選・本選を通じた来場者数は第4回大会で3千人を突破して以降、じりじりと減少している。コンクールの出来不出来を来場者数のみで判断するのはいささか乱暴だと思うが、出場者のモチベーション向上のためにも、早急に対策を講じるべきだろう。

開催地の浜松は、楽器生産地として世界に名高い。昨年末には念願だった「ユネスコ・クリエイティブシティズ・ネットワーク」の音楽部門に加盟し、「音楽の街浜松」として国内外へアピールをいっそう強める姿勢だ。だが正直なところ、今回の大会を取材する中で、そのような盛り上がりを感じることはできなかった。大会事務局が来場者に対して行った満足度アンケートでは過去最高点をマークしたというが、今後はオペラに関心の低い市民をどれだけ巻き込めるかが課題となってくるだろう。大会は地方都市の住人にとって本格的なオペラを耳にする貴重な機会のはず。難しい課題だと思うが、国内のオペラ界を牽引するような気概ある大会へと発展していったほしい。